

## 257. 平成8年度滋賀県下における 発掘調査の紹介(その1)

滋賀県下では、本年度も多くの発掘調査が行なわれ、貴重な成果を上げています。その成果と情報交換の場として、去る平成9年3月7日、恒例の滋賀県埋蔵文化財センター研究会—スライド発表会—が実施されました。

今後の参考として御活用いただくために、ここにその一部を紹介いたします。なお、寄稿くださいました方々に対して厚くお礼を申し上げます。

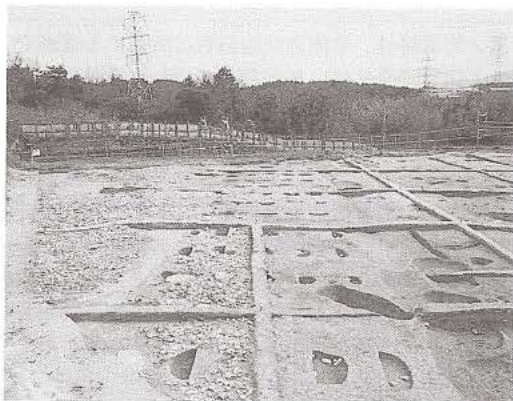
### 1. 近江国府関連調査最新情報

大津市大江五丁目近江国府跡・<sup>すがいけ</sup>管池遺跡  
大津市神領二丁目 <sup>そうやま</sup>惣山遺跡

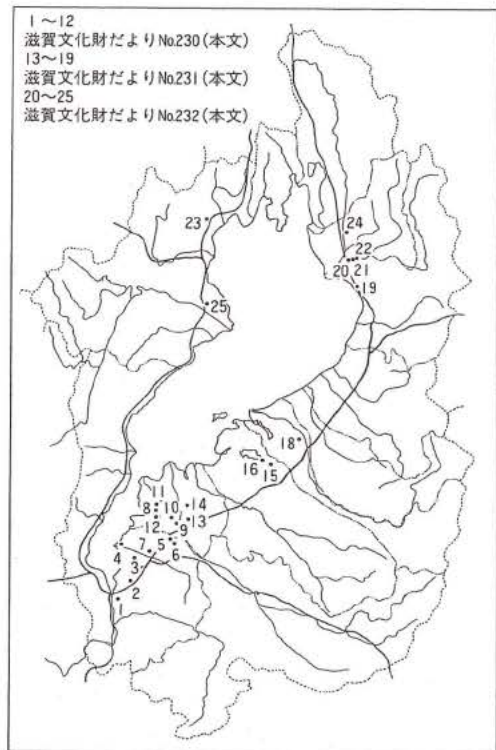
近江国府跡・<sup>すがいけ</sup>管池遺跡にあたる関西電力瀬田変電所内の調査では、古墳時代末から鎌倉時代にかけての遺構・遺物が見つかった。

古墳時代末の土坑は、幅1m、深さ約20cmで、焼土塊や炭等で埋まっていた。今回の調査では一番古い時期のもので近江国府の成立を考える上で貴重な資料である。

奈良時代の建物跡は南北二間、東西二間以上の掘立柱建物で柱が残っているものがある。特に注目されることは、現地表下2mから見つかったことである。従来、近江国府以北では、奈良時代の遺構があまり発見されていないのは、地下深く埋没しているためではな



礎石建ち建物(北より)



遺跡位置図(位置図の番号は本文と同じです)

いかと、考えさせられる機会を得た。

平安時代の建物は南北二間、東西二間の掘立柱建物で、同一場所で1回建直しが行なわれている。

鎌倉・室町時代の溝跡は南北に伸びるもので、溝内からは茶碗や炊飯具等の土器が多く出土している。井戸は直径1m、深さ約2m。上層で馬の頭骨が出土しており、おそらく雨乞等の儀式に際し犠牲となったものであろう。

近江国府の南東約500mに位置する<sup>そうやま</sup>惣山遺跡では、宅地造成に先立つ調査により、南北に連立する、総柱礎石建ち建物が3棟見つかった。建物は同一規模で4間×7間(6m×21m)。建物周囲には雨落溝が繞る。過去に県教委の調査により確認されている建物の軸と同一線上にのることから、この地に約150m以上にわたって、同一規模の建物7棟が建ち並んでいたのではないかと考えられる。出土遺物には、大量の瓦類が



あり、軒瓦には近江国庁と同じ飛雲紋系のものが採用されている。国庁に附属する倉庫群の可能性が高い遺跡である。

(大津市教育委員会 田中 久雄)

## 2. 縄文時代の貯蔵穴を検出 草津市野路町 野路岡田遺跡

野路岡田遺跡は中世の紀行文等に登場する中世東山道の宿駅の一つである「野路宿」の推定地と考えられている遺跡である。今回、民間開発に伴い発掘調査を実施したが、調査の結果、平安時代の建物跡や祭祀に関係すると思われる土器埋納坑などの他に、縄文時代中期末から後期初頭にかけてとみられる貯蔵穴2基を検出することができた。

検出された貯蔵穴は軸を揃え、また、平面形も楕円形を呈し、さらに内部には段を有するなど、構造的にも共通性が窺える。それぞれの規模はSK01が長さ2.35×幅1.1×深さ0.89m、SK02は長さ1.72×幅0.98×深さ1.05mを測る。貯蔵穴内部からは、石錘やサヌカイト製の搔器ならびに石鏃、これら石器製作時に排出されたチップなどが土器とともに出土している。なお、穴の底部からは炭化物が出土しているが、貯蔵用の木の実なのかは不明である。

草津市では、縄文時代の遺構は主として湖岸において検出されており、内陸部では明確な遺構の発見はできていなかった。今回の発見は、本市の縄文時代の遺跡分布の再考を迫る発見であるといえよう。

(草津市教育委員会 小宮猛幸)



貯蔵穴調査状況(調査区西側より)手前SK01、奥SK02

## 3. 古墳時代後期の橋脚遺構の発見 草津市御倉町 襖遺跡

襖遺跡は、過去数次にわたり行われた草津川改修関連遺跡発掘調査によって、弥生時代から近世にかけての複合遺跡であることが判明している。

今回の調査地は遺跡の東縁にあたり、遺構密度や種類などは限定された状況を呈していたが、調査区西側



橋脚遺構検出状況(調査区東側より)

において自然河道が検出され、内部より多量の遺物が出土している。出土遺物には流入遺物と目される石包丁などが含まれていることから、周辺に弥生時代の集落及び水田が存在することを窺わせる。一方、この他にも農耕具や祭祀用の木製品、古墳時代後期の遺物が多量に含まれていることから、当該河道は古墳時代後期の所産とみて大過ないであろう。

特に、当該河道床面からは、当該河道に架けられた橋脚遺構と目される杭列を検出した。検出した杭列は建築的にいうならば梁行2間、桁行1間を測り、河幅約15mの河道内を梁行3.7m、桁行約1mの間隔を以て配されている。下部構造を確かめるため断ち割りを実施したが何等、不沈措置は講じられておらず、単に直径10cm前後の杭を河道内に打ち込んだ、いわゆる「打込式井桁橋」であると考えられる。

同種の橋脚遺構は、守山市の下之郷遺跡や横江遺跡などで、弥生時代および中世の環濠内からの検出事例が報告されているが、自然河道内に設置された例は県内、或いは全国でも希少であり、今後、我国の土木技術史を検討する上で貴重な資料といえる。

(草津市教育委員会 小宮猛幸)

## 4. 奈良～平安時代の大型掘立柱建物等を検出 草津市南山田町 墓ノ町遺跡

墓ノ町遺跡は、草津市南山田町に所在する遺跡で、かつて民間開発に伴い発掘調査が行われた際に、古墳時代ならびに奈良時代の遺構が密集して検出され、集落が立地していたことが明らかにされている。

今回、その東側において雨水幹線の設置工事が計画されたため、発掘調査を実施することになった。前回の調査成果では、調査区の東側で遺構密度が低かったため、今回の調査地は遺跡の縁辺部にあたり、遺構の存在は希薄であろうと予想されたが、調査を開始すると多数の柱跡、溝跡等が検出され、当初の予想がくつがえされることになった。

検出された遺構は、古墳時代の溝跡、奈良～平安時





掘立柱建物跡検出状況

代の掘立柱建物跡12棟以上、井戸跡1基、河道跡等で、掘立柱建物跡の中には、大きな方形の掘方を持ち、条里方向に建てられた南北6間、東西5間以上の大型建物も確認されている。また、調査区北側で検出された井戸跡は、直径3m、深さ2mの規模で、土師器、緑釉陶器、灰釉陶器等が出土した。さらに調査区中央部で検出された河道跡は、東西に整然と延びるように思われ、また底部に多量の土器が堆積していることから、人工的な流路の可能性も考えられる。

今回検出した遺構面は、東の方に向かって高くなる傾向にあり、遺構はさらに東側に広がると思われることから、当遺跡はかなり大規模な集落であったと推測することができる。これまで奈良～平安時代の大集落は、矢倉から追分にかけての丘陵部を中心に立地すると考えられて来たが、今回の調査で琵琶湖に近い地域にも大規模集落が存在したことが明らかになった。

(草津市教育委員会 藤居 朗)

**5. 平安時代後期の小型如来立像出土**  
栗東町辻 辻遺跡

辻遺跡は、野洲川左岸の自然堤防上微高地に立地する。周囲は、東海道と東山道をつなぐほぼ中間に位置し、交通の要衝として栄えた地域である。これまでの調査では、4～7世紀の竪穴住居が300棟以上確認されており、この地域の拠点的な集落の一つとなっている。

今回の調査では、辻・小坂西部土地区画整理事業に伴う第4次調査で、約3,000㎡の発掘を実施した。確認した遺構は、縄文時代の竪穴状遺構1棟、土器溜まり、古墳時代の竪穴住居3棟、掘立柱建物3棟、土坑墓2基、周溝墓1基、白鳳時代の竪穴住居4棟、掘立柱建物1棟、奈良時代から平安時代後期の掘立柱建物10棟以上、井戸状遺構、埋納ピット、川、溝、耕作痕、室町時代から安土桃山時代の川、溝、江戸時代から昭和初期の耕作痕、土採り土坑、鋤器関連遺構がある。中心となるのは平安時代後期(10世紀後半～11世紀前半)の遺構で、この時期の柵になる可能性を持つピットか



小型如来立像出土状況

ら、小型の銅造仏像が出土した。高さ4.5cm、最大幅1.7cm、重さ17gで、形態は如来立像と判断される。腐食が著しいため顔立ちがはっきりしないが、ふっくらした造りで、衣や右手の表現が比較的よくわかる。当初は表面に渡金をしていたと思われる。出土状況は、ピットの検出面から約10cm下げた地点で、裏向きに横たわった状態で出土した。性格としては、有力者が念持仏として持っていたものを地鎮としてピットに埋納したものであろうか?以前の調査で、今回の調査区から200m範囲内に八稜鏡と銅印が出土していることを合わせると、調査地周辺に荘官クラスに値する有力者が居住していた可能性があげられる。しかし、調査地周辺の字名が「西八王寺」、「東八王子」であるように寺院との関連も今後考えなければなるまい。

(勸業栗東町文化体育振興事業団 近藤 広)

**6. 古墳時代後期の井戸を発見**  
栗東町大字高野 岩畑遺跡

岩畑遺跡は野洲川下流に形成された沖積地で最も標高の高い扇状地上部に立地する古墳時代の大集落遺跡である。これまでの調査で集落は式内社の高野神社周辺で150棟を超える竪穴住居の他前方後方型周溝墓等も確認されている。遺跡の特徴として5世紀前半の竪穴住居にL字形カマドがみられる(14棟)こと、鉄器の保有率が高いこと、韓式系土器の出土等があげられ、渡来人との関わりが指摘されている。今回の調査は高野神社参道前の町道拡幅に伴い、10m×110m、約1,100㎡の面積で実施した。

出土した遺構は6～7世紀の竪穴住居9棟、掘立柱建物数棟、井戸1基、溝や河川。12世紀の土坑、中近世の水路である。竪穴住居は規模の解るもの4棟のうち、1棟は6世紀で5×4.2m、7世紀前半のものが3棟で約3×4mである。小規模な7世紀の住居はカマドは持つが、床面に柱穴の無い構造である。井戸は4.7×3.8mの平面規模で、深さは3.8m、中央に一辺1



mの正方形の井戸枠痕跡が認められた。出土遺物から6世紀中頃に掘られ、6世紀末には埋められた事が判明した。古墳時代の井戸は当遺跡では初の確認である。6世紀中葉の溝は(断面V字及び台形で幅2.5m、深さ0.8mで)調査区の制限と河川に切られているため全容は不明だが、L字に屈曲している。多量の土器と伴にフイゴの羽口、鉄滓、鋳型片が出土した。平安時代末の土坑は最大幅3m、長さ4m以上の長方形で、深さは16cm、土師皿や羽釜、山茶碗、黒色土器碗などの多量の土器類が廃棄された状態で出土した。その他瓦が1点出土した、直径11.5cmの複弁八葉蓮華文軒丸瓦で、中房に「記」の陽印がある。

(勸業東町文化体育振興事業団 佐伯英樹)



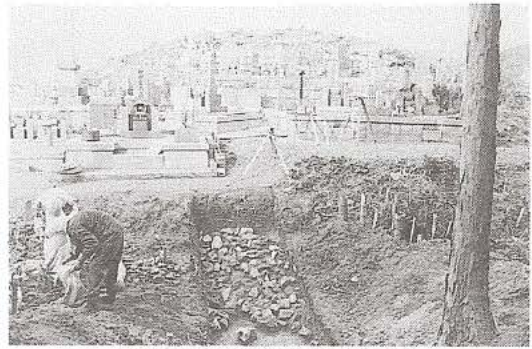
井戸

#### 7. 下戸山古墳の周溝と葦石を確認

栗東町下戸山 下戸山古墳

下戸山古墳は琵琶湖南部の沖積地を望む低丘陵地に築かれた古墳で、直径30cm程の円丘部分を除き現在墓地として利用されている。南約200mには北谷11号墳を含む草津市の北谷古墳群(消滅)、南東300mには小槻大社古墳群、さらに北西600mには岡遺跡の栗太郎衙を狭み、地山古墳が存在する。古墳は1993年度に墳丘測量調査が実施され、円丘部の直径約50m、高さ7.5mで、地形からみて丘陵尾根の伸びる西側に前方部が付く可能性が強まった。

今年度は地形測量の成果を踏まえ、正確な墳丘規模を確認するため周溝推定部分3カ所にトレンチを設け発掘調査を実施した。その結果2カ所から墳丘基底部に残る葦石根石部分を確認した。第1トレンチでは幅約5m、深さ約2mの周溝と葦石を検出した。葦石は地山1号墳と同様に北方の独立丘陵安養寺山に産する角礫状の石材が使われており、根石列の石は比較的大きく約40cm程で、他は大小さまざまに葦かされている。埴輪は周溝底や転落した葦石の間から少量出土した。土師質の円筒埴輪および円筒壺形(朝顔形)埴輪の破



葦石検出状況(転落石除去前)

片である。その他布留式併行期の受口状口縁甕の破片等が出土した。

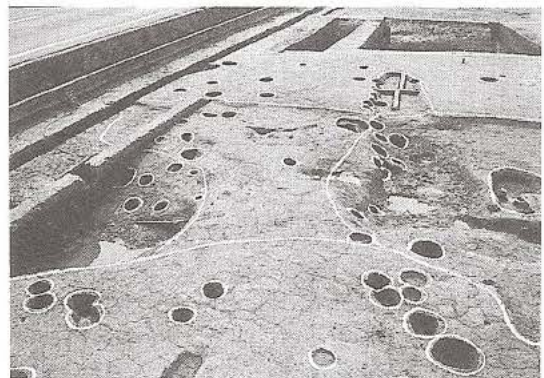
今年度の調査により下戸山古墳の円丘(後円部)の規模は約50mと判明し、周溝及び葦石の遺存状況が明らかになった。下戸山古墳は4世紀後半築造の北谷11号墳に続き築造された首長墓と推定される。

(勸業東町文化体育振興事業団 佐伯英樹)

#### 8. 環濠集落の出入口が見つかる

守山市下之郷町 下之郷遺跡の調査

下之郷遺跡は、野洲川左岸平野の扇状地、扇端部分(標高95m)に位置する弥生時代中期後葉の環濠集落である。環濠集落は舌状にのびる微高地上に立地しており、集落の北東側と北西側には谷地形が確認されていて低地が存在するものと思われる。これまでの調査から環濠は、基本的には3条で、部分的にはその外側にさらに3条ほどの条溝が掘られた地点が確認されている。今回の調査は、集落の北西端部分を宅地造成工事にあたり発掘調査をした。その結果、3条の環濠とその内側で掘立柱建物3棟などが見つかった。見つかった建物のうち2棟は切り合い関係があり、建て直しの可能性がある。古い時期のものは1間×4~5間(梁行3.6m×桁行8.4m)の棟の長い建物で、高床形式の



環濠集落の出入口



建物である。新しい時期のものは、1間×3間（梁行3.6m×桁行5.5m）の建物で、かなり床の高い建物に復元される。もう1棟は、少し間隔をあけて建てられていて、1間×2間（梁行3.6m×桁行3.6m）の高床建物である。これらの建物の北西側には、環濠3条が掘られている。いずれも幅5m、深さ1.5m程ある。環濠の埋積土は、外濠から内濠むけて、汚れがひどくなり、内濠については人為的に投棄された遺物や混入物が目立ち、それに比して外濠は、自然に堆積した状態が看取される。内濠には、もともとは環濠として機能していた場所を埋めたてて土橋とし、集落内への出入口とした場所が確認された。出入口部分には、内側に2本の門柱が建てられ、土橋の両側には木杭を立て並べ柵となし、集落内へ簡単に入れないようにしている。中濠には、犬走り状の中段が設けられている。また、木橋の痕跡とも思える木杭が残っていた。出土遺物には、出入口周辺から磨製石剣、石鏃、打製石鏃、焼け焦げて破損した木製の弓（3本）等、外濠からは銅剣（中細型）が1本出土した。高床建物を、集落の出入口をおさえる防衛的な建物とみれば、弥生時代の戦いの様子が見えてきそうだ。

（守山市教育委員会 川畑和弘）

### 9. 郡衙の出先機関か 守山市吉身町 二ノ畦遺跡の調査

中山道が野洲川を越える地点から西へ約200mの工場跡地を宅地造成工事に先立ち発掘調査した。調査地の西際には式内社「馬路石辺神社」が、南西隣地には古代寺院「益須寺」が位置している。今回の調査では、奈良時代の建物群や井戸、土坑、旧河道、等が見つかった。見つかった建物は、いずれも掘立柱建物で、4～5間×2間の側柱建物や3間×3間の総柱建物、それと2～3間×10間以上の長屋のような建物があり、合わせると20棟以上が確認されました。建物群は軒を同一方向にそろえて整然と建てられていて、周囲には



検出された掘立柱建物

幅1m、深さ60cm程の溝が方形に巡らされ、外界と内側を明確に区画している。また建物と建物の間隔や建物と溝との間隔、そして建物の柱間の寸法などには、かなり正確な尺度が観て取れ、さらに外周にあたる溝から主要幹線道路にあたる東山道（現中山道）までの距離もちょうど2町にあたることなどは、かなり計画的に造営された建物群であるということが出来る。この建物群の性格については、出土遺物に生活雑器や調理に使う土器が少ないということや遺跡の成立が8世紀になって突然誕生し9世紀には徐々に衰退することなどから、奈良時代の農村（一般村落）という印象はなく、官衙的色彩の強い建物群と言うことができる。考え方として、郡衙の出先機関や郷衙、野洲川の渡し場所に設けられた物資流通の拠点施設等をいくつか挙げる事ができるが、現時点では明確にすることができず、周辺の遺跡の調査もふまえて評価していく必要がある。

（守山市教育委員会 川畑和弘）

### 10. 8世紀前半代の大型掘立柱建物を発見 守山市守山町 吉身西遺跡



大型掘立柱建物(北より)

吉身西遺跡は縄文時代後期から一部江戸時代までの複合遺跡である。今回は目田川河川改修に伴い、約2,500㎡を対象に調査を行った。検出された遺構は弥生時代後期に属する竪穴住居2棟（内1棟は五角形住居）、古墳時代前期に属する竪穴住居2棟・溝1条、古墳時代後期（6世紀代中心）に属する竪穴住居7棟・溝1条、古墳時代後期の古墳の周溝と思われる溝、8世紀前半の掘立柱建物が少なくとも3棟、9世紀代の溝1条などである。

このうち、8世紀前半のものと思われる掘立柱建物1棟は3間（約7.2m）×6間（約13.4m）で約96.5㎡の規模を有す大変大きなものである。建物の主軸はやや東にふるがほぼ南北方向である。柱の掘り方は約1.0×約0.8mの長方形を呈す傾向があり、柱の直径は



20～25cm程である。他にも何棟か掘立柱建物が建つと考えられ、大型掘立柱建物とL字、或いはコの字の配置をなす建物の存在が考えられる。

この建物の性格として、役所性格、豪族居館的な性格の可能性が考えられるが、遺物などに特徴的なものがなく、その決定材料に欠けるといえる。ただ、この周辺では弥生時代後期より7世紀にかけて小規模単位の住居群が連綿と営まれていたと考えられ、その延長上で出現したものと考えられるのではないだろうか。

(守山市教育委員会 山中由紀子)

### 11. 竪穴住居から韓式土器が出土 守山市小島町 あびる阿比留遺跡

阿比留遺跡は守山市小島町に所在する古墳時代の集落遺跡である。民間の宅地造成工事に先立って、約3,000㎡を調査し、古墳時代後期の竪穴住居群、掘立柱建物、井戸、土坑、溝などを検出した。今回の調査成果の中で特に注目されるのは、韓式土器が出土した竪穴住居の存在である。この住居は一辺が約3.5mと小型で、北辺中央のカマド状施設の周辺から韓式土器を含む土器が集中して出土した。韓式土器は鉢が2個体と甑が1個体あり、いずれも軟質のタイプのものである。阿比留遺跡では、この住居の時期が集落の開始時期と考えられ、集落の開始にあたって渡来人の関与があったことが考えられる。

その他、旧河道からは大量の土器と木器が出土した。木器は櫛、下駄、弓、横槌、鋤、槽、建築部材、形代(刀形、陽物)などがあり、中でも刀形の数量が多いことが注目される。これらは旧河道の東岸に約30m以上にわたって堆積しており、河岸で何らかの祭祀をおこなっていたことが考えられる。遺物の年代は6世紀後半代が中心とみられる。なお、下層からは韓式土器や初期須恵器も出土している。

(守山市教育委員会 小島睦夫)



竪穴住居土器出土状況

### 12. 古墳時代中期のカマドを伴う住居跡を検出 守山市守山町 かなもりひがし金森東遺跡

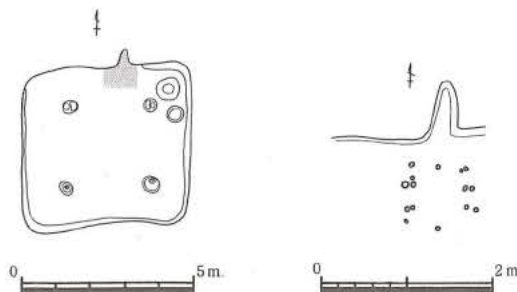
金森東遺跡は、標高90m前後に位置し、県立守山高등학교の周辺に広がる遺跡である。これまでの調査で、弥生時代中期から平安時代にかけての集落及び墓域等が確認されている。今回報告する調査は、区画整理事業にともなう第12次調査で、平成8～9年度にかけて約8,000㎡を対象に発掘調査を行なう予定である。

現在までのところ約3,000㎡の調査が終了しており、弥生時代後期から古墳時代中期の竪穴住居13棟、掘立柱建物2棟等を検出している。今回は竪穴住居のうちカマドを有するものについて報告する。

一辺約4.7mの隅丸方形プランの住居跡で、覆土は黒褐色土を基本とするものである。検出面から床面までの深さは25～30cmをはかり、柱穴・カマド・貯蔵穴・周壁溝で構成されている。支柱穴は4本柱で、柱穴間は1.8～2.0mの距離をはかる。カマドは北辺やや東寄りに設けられ、土師質の土製支脚を有していた。煙道は、傾斜した掘り込みで60cm程延びている。貯蔵穴は、北東隅に径75～80cmで深さ50cmのものと、そのすぐ南側に径50～55cmで深さ20cmのもの2つを検出した。ただし、南側に位置するものは貯蔵穴として機能していたかは不明である。周壁溝は幅5～15cmで深さ5cmをはかる。出土した遺物から5世紀半ばから後半の時期が想定される。

遺構の概要は以上であるが、カマド部分を完掘したところ径4～8cm、深さ10cmをはかる小ピット15個が、炊口及び煙道部に1つずつ、他の場所にはほぼ2つ一組になって列状に検出された。カマドのドーム部分を構築する際の骨組みにしたと思われるが、このような報告例はまだ少なく、大陸から伝来した当時の技術的変遷を解く上で重要な鍵となろう。

(守山市教育委員会 小出 岳)



住居跡平面図

トーン部分拡大図

住居跡平面図 トーン部分拡大図